



Data

監督・脚本：フランソワ・オゾン
原作：ファン・マヨルガ
出演：ファブリス・ルキーニ/エル
ンスト・ウンハウワー/クリ
スティン・スコット・トーマ
ス/エマニュエル・セニエ/
ドゥニ・メノーシェ/バステ
イアン・ウゲット/ジャン＝
フランソワ・バルメール/ヨ
ランド・モロー/カトリー
ヌ・ダヴニエ

👁️👁️ みどころ

「書き弁」としては事実に則り、かつ法律に適合していることが大切だが、小説家にはそれは全く不要。あれこれと登場人物を想定し、ストーリー構成を考えながら文章を綴るのは楽しいものだ。しかし、多感な少年が中産階級の級友の家を舞台として綴る、スリルとサスペンスそして官能に満ちた(?)物語とは・・・?

空想が空想を生み、妄想が妄想を生むのは小説の宿命かもしれないが、ここまで他人の生活に介入していいの? フランソワ・オゾン監督作品はユニーク! そして、フランス映画は面白い!



■□「書き弁」VS小説家■□

弁護士の仕事はしゃべることと書くこと。そのどちらが得意かによって、「しゃべり弁」と「書き弁」に分かれるが、両方とも得意という人も時々いる。もともと、「書き弁」として優秀という意味は、一つ一つの事実の整理の仕方と全体の構成の仕方がかっちりしていることと、その事実に対していかなる法律をどのように適用すべきか論理的かつ明快に書かれているということだ。それに対して、作家の文章や作品の優秀さは、その作家が創造する架空の人物、架空の世界、架空のストーリーにいかにか読者を引きずり込み、興味を持たせるかということだから、事実にもとづく必要はさらさらない。つまり、どんなでっちあげでも、それなりに説得力があり、興味を持たせることができればいいわけだ。弁護士生活を40年続け、「しゃべり弁」と「書き弁」の両立を目指してきた私の、そんな目で本作を観ると・・・?

■□■これが高校生の作文・・・？■□■

日本では若者たちの文章力の劣化に目に余るものがあるが、それはフランスの高校でも同じらしい。高校で国語を教えている元作家志望の教師・ジェルマン（ファブリス・ルキエーニ）が生徒たちに与える「週末の出来事を書きなさい」という宿題に対して、たった2行の文章しか綴れない生徒の作文を見ていると、絶望的……。そんな中、クロード（エルンスト・ウンハウワー）の作文は、前から入ってみたいと思っていた級友・ラファ（パスティアン・ウゲット）の家を数学の宿題を手伝うという口実で訪れたときの出来事を綴ったものだが、中産階級の家族のあり方を皮肉っぽく描いた文章は秀逸。これが高校生の観察眼？高校生の作文？と思えるものだった。



【危険なプロット】

10月、ヒューマントラストシネマ有楽町、Bunkamura ル・シネマほか
全国ロードショー 配給：キノフィルムズ
©2012 Mandarin Cinéma - Mars Films - France 2 Cinéma -Foz

現代アートを扱う画廊「ミノタウロスの迷宮」に勤めるジェルマンの妻ジャンヌ（クリスティン・スコット・トーマス）にその文章を読んで聞かせると、ジャンヌも興味津々……。しかも、この作文のラストには思わせぶりに、「続く・・・」とあったから、かつて私が渡辺淳一の日経新聞夕刊への連載小説『失楽園』の続きを渴望したように、ジェルマンとジャンヌもクロードの作文の続きを期待することに……。

■□■こんな個人指導はやバイのでは・・・？■□■

日本では「AKB48」の大ブレイク以降、制服とりわけ「なんちゃって制服」が大はやりだが、自由と個人主義を何よりも尊ぶフランスは、そんな日本やまたイギリスとも違って制服などないのが当たり前。ところが、ジェルマンの高校では試みに制服が導入されたが、どうも母親がおらず、元労働者の父親と二人暮らしという貧しい家庭環境にあるクロードには、それが好都合だったらしい。それに対して、数学はからっきしダメだが、父親（ドゥニ・メノーシェ）とともにバスケットが大好きで仲が良く、また、それを温かく見守る美しく優しい母親エステル（エマニュエル・セニエ）の3人で生活しているラファは幸せいっぱい。住んでいる家もクロードの家の4倍はあるらしい。したがって、数学の宿題を教えるという口実でラファの家を訪れたクロードは、何やかやと口実を設けてはいつもラファ家内部の探検を……。

クロードの作文の「続き」はクロードが出会うそんなラファ家での出来事を綴ったものだが、当初「個人の悪口を平気で表現したような作文は問題だ。本人に知れたらどうする？」

と建前論を言っていたジェルマンも、「先生に書いたんです」と言われるとあっさり降参。以降、クロードに対して課外で作文の個人指導をするほどまでに……。そこで元作家志望らしく、クロードの文章やストーリー展開にいろいろと注文をつけるのだが、クロードはジェルマンのそんな注文はお見通しのようで、ジェルマン以上に自由自在にストーリーを綴っていったからすごい。しかして、それは空想だけのこと……？それとも……？

■□■年頃の少年なら、誰だってこんな空想（妄想）を……■□■



『危険なプロット』 ©2012 Mandarin Cinéma - Mars Films - France 2 Cinéma - Foz
10月、ヒューマントラストシネマ有楽町、Burkamura ル・シネマほか
全国ロードショー 配給：キノフィルムズ

ーにしても、年頃の少年なら誰だって年上の魅力的な女性に対して憧れを抱くとともに、さまざまな空想（妄想）を抱くのは当たり前。それなりに立派な家に住む中産階級の家庭とはいえ、ラファの父親の仕事は中国がらみもあって(?) 少しつらいらしい。また、この父と子はバスケットで絆が強く結ばれているが、妻のエステルはインテリアに興味を持ち、家の改装のことばかり考えているから、必ずしも価値観の共有はできていない。

もつとも、クロードの小説の「続き」によると、ラファの父とエステルは時々愛し合っているらしく、その結果、エステルが妊娠したことを伝えるとラファの父は大喜び。しかしなぜ、時々ラファの家に行って数学を教えているだけのクロードがそんなラファの父とエステル夫妻の「夜の生活」のことまで知ってるの？さらに『太陽の季節』では障子に男の性器を突き立てるシーンが最大の問題シーンとして物議をかもしましたが、クロードの「小説」の「続き」では、夫と息子の留守中、クロードとエステルがキスを交わすシーンまで登場してきたからビックリ！これって、単なるストーリー構成上の空想？それとも……？

■□■クロードは何を求めているの？■□■

多感な少年時代は、自分の勉強やスポーツの出来具合さらに女の子へのもて具合はもちろん、自分の生まれた家庭環境や経済状況等々を日々考え、周りの人たちとその優劣を比

較するものだ。また、それを自由に口に出してしゃべることができる子供の時期を過ぎると、一人で空想することにより、いろいろな世界を広げていくものだ。クロードはそんな感受性が人並み優れた高校生のようなだから、ラファと同級生ながらその精神性においてははるかに大人だ。また家庭的に恵まれ、何の不满もないラファに対して、経済的にも家庭的にも恵まれていないクロードが、ラファのそういう世界に飢えていたのは当然だ。そんな少年時代のクロードの思い出の一部は、私の少年時代にも共通するものがある。



【危険なプロット】©2012 Mandarin Cinéma - Mars Films - France 2 Cinéma - Foz
10月、ヒューマンラストシネマ有楽町、Burkamura ル・シネマほか
全国ロードショー 配給：キノフィルムズ

しかして、クロードがラファ家に求めたものは父子の絆や母親の愛などたくさんあるが、しょせんラファ家は他人だから、あまり多くを求めすぎると、またあまりその中に入りこみすぎると、まずいのでは？さらに、ラファの母であり、ラファの父の妻であるエステルに対して、母の愛以上に女性としての愛を求め始めると・・・。

■□■こちらの家庭のみならず、あちらの家庭も・・・■□■

自分の母親が級友のクロードとキッチンでキスを交わし、熱っぽい抱擁を…。ラファがもしそんな姿を目撃したら、たちまちラファ家には大きな亀裂が…。他方、クロードの物語を聞いて、アドバイスを与えるだけの立場だけでも少しヤバいのに、ラファの数学の成績をよくするため、クロードからの暗示によって事前に数学の問題をラファに漏らしてしまったジェルマンは、もしそれが学校にバレたら懲戒解雇ものだからかなりヤバい。さらにクロードの物語が単なるラファ家の描写から、夫婦の寝室の秘密さらには人妻と高校生との秘密のキス等々、スリルとサスペンスそして官能に満ちたストーリー展開になると…。

他方、クロードの作文を常々読み聞かされることによって、ラファ家で起きた出来事をすべて知り尽くした立場になったジャンヌは、ラファ家で危機に陥ったクロードが救いを求めるかのように夫の留守中、自分の家を訪れてくると…。『危険な情事』（87年）では、マイケル・ダグラス演じたタン弁護士は、魔性の女（ファム・ファートル）アレックスの出現によってエライ目に合わされたことは周知のとおり。しかして、一見純真だが、かなりの策略家の少年クロードの出現によって、ラファ家はもちろん、夫婦水いらずで仲良く生活を続けてきたジェルマンとジャンヌ夫妻にも大きな危機が…。

2013（平成25）年10月28日記